

接ぎ穂をあてる 梅原ひろみ

「短歌往来」七月号の特集「菱川善夫の批評と精神（生誕九十年）」が滅法面白かった。菱川は昭和四年、小樽の生まれ。北大文学部を卒業後の昭和二十九年、二十五歳で「敗北の叙情」により短歌研究評論賞を受賞し、気鋭の評論家として登場。戦後の前衛短歌運動を批評の側面から強力に支えた。七十八歳で亡くなるまで一貫して札幌を活動の拠点とし、中央への発信を続けた。

特集では十一名の論者が評論を、福島泰樹が回想歌十首を寄せている。論者それぞれの立場から、批評活動の概観あり回想エッセイ風あり、活動初期から最晩年までを辿って格好の菱川善夫入門となっている。どの稿も深い敬愛をもって書かれており、菱川存在の大きさをあらためて思わずにはいられない。

中でも注目すべきは阿木津英「批評家菱川善夫の死角」である。菱川は中城ふみ子を早くから取り上げ「性と官能とをもって日常性を破壊してゆくジャンヌ・ダルク」「中城ふみ子は私だ」というほどの思い入れを持ってふみ子を論じてきた。が、阿木津はふみ子の「美しく漂ひよりし蝶ひとつわれば視野の中に虐ぐ」への菱川評「加虐的な快感は、女の深部にひそんでいる共通の心理」「虐げるのは、虐げられることを渴望する心の裏返しでもある」などの例を挙げながら、なぜ菱川は「中城」ではなく「女」

と一般化するのか、「虐げるとか虐げられるとか、あまりにも男の側のロマンティックな性欲妄想でしかないだろう」と批判する。個の自由を徹底して尊重した筈の菱川にして、「女は」と個を無化してしまう。こうした一般化は私なども社会に出て幾度となく耳にしてきたが、短歌の評論の中に活字として改めて出てくると、やはり強い違和感がある。批評活動の価値そのものとは別問題である。「時代がもたらした限界」と留保しつつも、阿木津は冷静に菱川の全体像の中のひとつの死角を指摘している。

菱川は「どこで現代と近代を区別するかという問題は、実は近代短歌の何を否定するかによって決まる」とし「さらに、近代短歌の確たるものをもとらえるという作業を入念に行っていた」「〈美と思想〉の文学史家・菱川善夫」田中綾」という。阿木津は菱川のひとつの限界を見つめ、それによって菱川の批評精神を継ぐとしている。これこそ短歌史を書き継ぐべく菱川自身が近代短歌に向き合い、自ら言揚げた姿勢に他ならない。

同じく加藤英彦も「抵抗の方位」で「あの菱川善夫にもあったはずの限界を確かめ、その何を引継ぎ、どこに接ぎ穂をあてるのかといった主體的な問い返しのない回顧談に終始しては、彼岸に旅立った菱川に申し開きが立たないように私には思える」と阿木津と同じ姿勢で論じている。

権力という「全体」に対して「個」を死守する闘いに終生挑み「人間が人間であるとする願望を表現の核に据えた」(田中)菱川から、「前衛の抛り所とした『個』が『全体』へと崩し的に溶解した」(森井マサミ「これからの『前衛』」)現代を生きる我々が、何を引継いでいけるのが今、問われている。